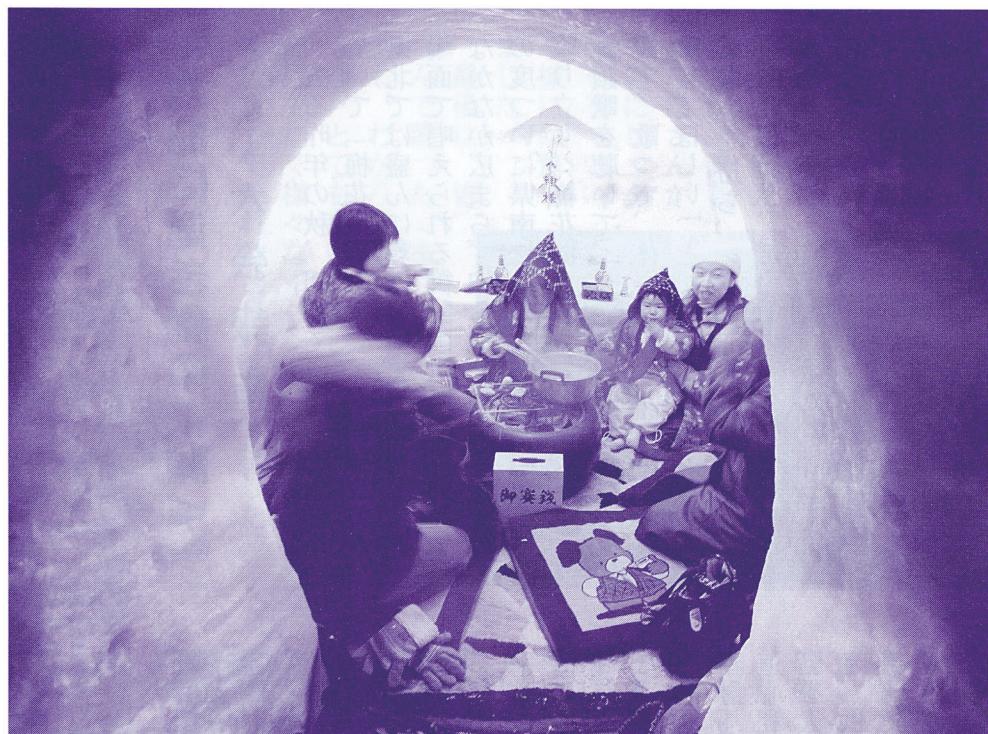


山河自然のきびしさと めぐみに今を生かされて

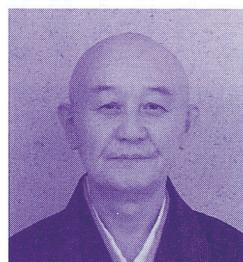


横手かまくら (写真: 藤島 源)

平成25年2月25日
再 37号

発行 梅花流師範・詠範の会 会長 岩 館 祖 芳
題字 初代会長・故加藤信三師
編集者(広報部)亀 谷 隆 道

梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和 太寧寺 伊藤道人
電話 (0188-96-2029)



秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 岩 館 祖 芳

新年を迎えました。いかがお過ごしでいらっしゃいましょうか。年末からの豪雪、寒気、力ぜなどにお気をつけ下さい。ところで私ごとです。

「三宝御和讃」をお唱えしてたら、小学四年の孫娘が「こころのヤミって、どんなヤミ?」と、のたまつたものであります。

『ここで爺さん、少しもアワテズ(?)…』、思いもかけぬ質問に、しどろもどろジャコケンにかかる。ことば選んで説明したに、ミカンほおばり目はキヨロキヨロ。終わりを待たずハイドーモ……。アナ嘆かわしや情けなや、問い合わせの深みはナニホドなるか、孫の心も読み取れぬ……心のヤミは我れそのもの……』

日頃、梅花は「歌詞が命」、梅花流は、佛祖の教えの実践と学んで來た筈が、身についてないティタラク。恥ずべき姿でした。

ちなみに、「あなたに心の闇は?」「ナシ」となんとスバラシイ!! それが佛祖のお導きでしょう。梅花流の目指す姿ですよネ。学ばせていただきます。

昨年、ご存知のように、県南大会が大仙市で開催されました。願つて止まない地域での大会。大成功だったと思います。まさに不屈の命の芽が花開いたものだと思います。関係下さった皆様のご努力、参加下さった皆様に心から感謝申し上げますと共に、本年の大会もと願い上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

こころのヤミって、ドンナやみ?

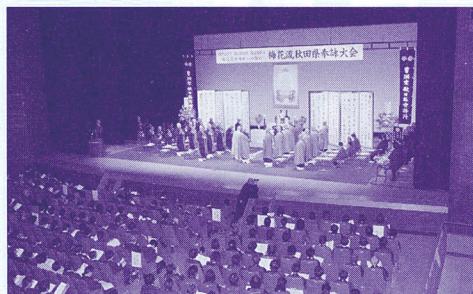
い～大仙市に響く』

『大曲に響く』

大会報告

去る昨年の秋、初めて県南の地大仙市に於いて「梅花流奉詠大会」が開催された。

県北では盛んに葬儀、供養、鎮魂と法要の場面で唱えられる御詠歌は県南においてはなかなか広まらず知られていなかつた。この度ついに県南に降り立ち「梅花流詠歌を聴いて、体験してほしい」と願いを持ち、「向き合おう、伝え合おう」を大会テーマにしての開催となつた。



秋色深まりつつある十月十四日、大曲市民会館には各寺院の講員三三〇名のほか、一般の観客四二〇余名が参集し観覧した。

大会は四部に分けられ開会式と東日本大震災追悼献詠のあと、第二部では五組の登壇奉詠が行われ一糸乱れぬ唱和の妙を聴かせて頂いた。

県南・中央地区梅花流奉詠大会開催

第三部は大会特別講師として女優「浅利香津代」さんによる『幸せに生きる』と題して

津代さんによる『幸



の講演。

秋田出身である浅利

さんはその親しみのある秋田弁に身振り手振りを交えて「自分の

幸せは自分の心が決めること」「日々の生

活の中にある幸せに気づくことの大切さ」

等々を女優人生の経験から語つて頂きまし

た。続く第四部はいよいよ「梅花流詠歌

への誘い」と題して師範詠範の皆様の登壇

奉詠。曲目は「新亡精靈、報恩供養、伝心、

道心利行、三宝詠歌」を奉詠。曲の間に法

話を入れて「この世の無常の前に悲しみ嘆

き、供養し祈り、報

恩感謝と仏の慈悲に

気づき、共に支え支

えられて生きていく」

という一般の観客の

皆様にもわかるよう

に物語風に展開し、

最後に「まごころに

生きる」～出会いも

別れも抱きしめて、

生きてる今を愛して



梅花にふれて

二坂範子



雲岩寺寺族

十月十四日に大曲市民会館

で開催されました梅花流奉詠大会。全国で

は六十回、秋田県では五りましたが、私は

いいタイミングでこの大会と出会う事がで

きたのだろうと思いました。と言いますの

も、私は昨年結婚し、主人はお坊さんであ

りますので、お寺の事は日々勉強中の身で

ございます。

その中で、現在主人が秋田県宗務所の養成講習を受けていますが、梅花とはどのようないものなのが私自身がその内容を知るに良い機会になるだろうと重い大会に行こうと決めました。

当日は、私一人では不安もありましたので母を誘い一緒に行ってもらいました。実

いこう～を講員観客共に講習を受け、閉会式では大合唱をもつて大円成となりました。この初体験の感激を、今回初めて梅花流詠歌に触れた寺族さんや講員さんに寄せて頂きました。アンケート結果と共に掲載し報告とさせて頂きます。

いざな 『梅花流詠讚歌への誘

際、私も母も梅花を生で聞くのは初めてでした。静かな会場に響く声は、心地よく体の全身が引き込まれていくように感じる時もあれば、何だか切ない気持ちになり、目に涙が滲む時もありました。初めて見る梅花の世界は、作法も綺麗で作法も綺麗で

すごく丁寧に歌い上げられ

ているのだと

感じました。

それと同時に

壇上でお唱え

している講員

のみなさんが

綺麗にピッタ

リそろつてい

る様には驚き

ました。

最後に、皆

さんで歌った「まごころに生きる」という

歌も、わかりやすく誰にでもお唱えできそ

うな、とても良い曲でした。このような場

だけではなく様々なイベントでお唱えし、益々広まってくれると良いと感じました。



「梅花流秋田県奉詠大会」に参加して

阿崎 美紀子

香最寺梅花講

ります。また、自然体でお付き合いのできる人々との出会いはとても有り難く、共に梅花流詠讚歌をお唱えし続けていきたいと思います。

◎一般入場者アンケートより

来場者は男性二割、女性六割。年齢は六、七〇代が多数。初めて聴いたという方が七割。梅花の登壇奉詠は六割が大変良いとしていますが、自分で唱えてみたいという人は二〇%弱で、また聴きたいという人の方が六三%で多く、自分でやるには、難しいとの思いがあるようです。

感想を抜粋してみると

①お唱えの意味がわからなかつたが「送り火迎え火」の歌にはジンと来ました。

②心を打たれました。感動しました。

③気持ちが安らか、ゆっくりしました。

④「まごころに生きる」を覚え心が洗われる思いでした。感謝です。

⑤素晴らしい。コーラスとは違い、別の意味で心に響きました。

*歌詞の内容や意味がわからないとの意見があるものの、心には感じられたみたいです。今後の歌詞解説と実践が目標となりました。



梅花のふるさと

（詠讃歌の生まれた風景／その十五 大本山總持寺二祖峨山禪師讚仰御和讃）

峨山さまの道 總持寺二祖峨山禪師

大本山總持寺二祖峨山禪師讚仰御和讃

孝心厚き峨山さま

瑩山禪師を扶けられ

永光總持寺の御寺を

都べさせ給う尊さよ

數多のみ弟子撫育られ

二十五哲の誉あり

都や村に法を説き

教え弘めて隈もなし

高野本光 作詞

◇永光寺と總持寺◇

太祖・瑩山禪師には多くの優れた弟子がおりました。なかでも永光寺を嗣いだ明峰さまと、總持寺

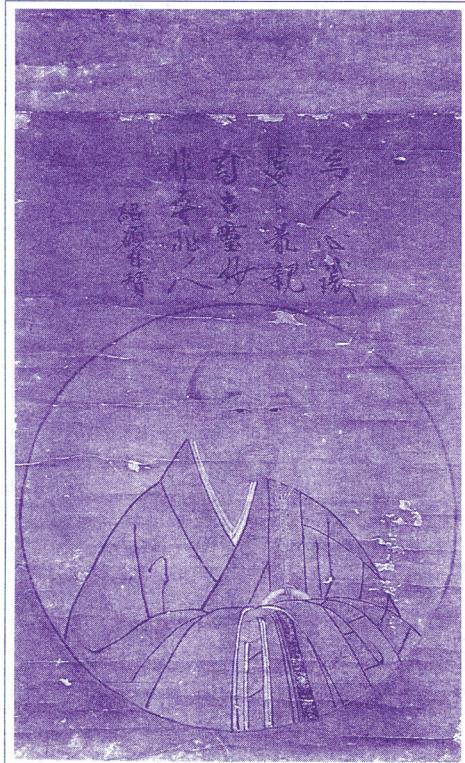
寺を嗣いだ峨山さまは二神足と言われ、特に大きな功績を残しています。この二つのお寺はどちらも能登半島にありました。永光寺は半島つけ根の酒井に、總持寺は半島先端に近い門前にあり、その間は約五十キロの山道があります。

◇二つの月◇

峨山さまは、能登の出身でした。はじめ天台宗で出家し、京都に来ていた瑩山さまと出会いました。しかしこの時はまだ機縁かなわず、数年後に再び瑩山さまを加賀（金沢）大乗寺に訪ねました。ここにおいて峨山さまは曹洞宗に転宗し、禪の教えを瑩山さまと、その師・義介さまに学びました。

ある日のことです。瑩山さまが熱心に修行に励んでいる峨山さまに尋ねました。

「あなたは一生懸命修行に打ち込んでいますね。ところで、月に二つあるこ



峨山韶碩禪師頂相

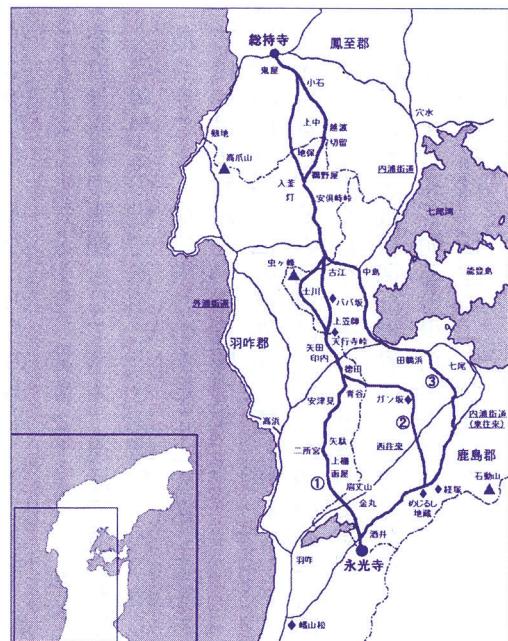
月が二つ？ 峨山さまはいつたい何のことかわからません。瑩山さまは続けます。

「月に二つあるということを知らなければ、曹洞宗の教えを受け継ぐものとは言えないのだよ」この言葉に峨山さまは自分の修行を振り返り、はげしく反省しました。そしていつそう厳しく修行に打ち込むようになったのです。そうして月日に移ったある年の暮れ、月の皓々と照らす寒夜にひとり坐禅する峨山さまの耳元で、瑩山さまが指をパチンと弾きました。その音によつて峨山さまは迷いからめざめ、瑩山さまの真意をお悟りになりました。

二つの月とは何でしょう？

禅宗には向上と向下という二つの方向があります。理想に向かつてどこまでも厳しい修行を重ねてゆくこと、それが向上だとすると、俗世を離れて

峨山道



しかし瑩山さまの導きによって、二つの月をはつきりとお悟りになった峨山さまは、それ以後、

ご自身の修行はもちろんのこと、人々への教化活動においても、こまやかな愛情に満ちた接し方をされたようです。

◇ 峨山道 ◇

峨山さまが、總持寺のご住職をされていた頃、永光寺の明峰さまが住職位を退き、その次のご住職も引かれた後、峨山さまが永光寺のご住職を兼ねられた時期がありました。

その間、心を尽くして両寺の運営がおろそかにならぬよう、お勤めになりましたが、その頃のお話が伝わっています。

それは、永光寺の朝のおつとめを終えた峨山さまが、門前までの長い山道を走り抜け、總持寺の朝のお勤めに駆けつけたというのです。五十キロの道を一朝のうちに走り通すなど、ちょっと考えられないようなことですが、今でも能登では、その山道を「峨山道」と呼んで、逸話とともに大切に伝えています。また總持寺（明治時代に火災に遭つて現在は神奈川に移転しています）では、朝課の時に、『大悲心陀羅尼』というお経を、ふだんよりもずっとゆっくりした調子でよむ真読という読み方で読んでいます。それは、山を越えてやつてくる峨山さまを待ちながら読んでいるからだ、とも伝えられています。

◇ 全国へ広がる教え ◇

峨山さまは、總持寺の行く末についても心を傾けられ、五院と言つて、五人の僧侶が共同で總持寺の運営にあたつてゆく仕組みを実施されました。また五院をはじめとする、優秀な弟子たちを輩出され、その弟子たちは總持寺を本寺とする末寺や孫末寺を、北陸や東北、東海をはじめ、全国津々浦々に開いていきました。彼等のうち二十五名は、特に二十五哲と称され、曹洞宗の教えが全国的に展開していく、いしづえを築いたのです。

九十歳をこえる長寿を全うされた峨山さまは、平成二十七年には六百五十年の大遠忌を迎えることになります。

身横義
内成來
九十九

峨山韶碩禪師遺偈

て孤高の高みへ行くのではなく、それとは反対に人々と一緒に生きることによって、苦楽をともにし、その交わりの中での人の苦しみを救つてあげよう努めること、それが向下ということになります。修行にまい進する姿、一般社会に身を投じ汗まみれになつて生きてゆく姿、一見反対に思えるこの二つのあり方は、どちらも仏教者の真の姿とされているものです。眞実のあり方は、二つの姿ををしていると言つてもよいかもしれません。どちらか一つだけではない。そのどちらをも追求してゆくことが仏道修行では求められます。これが瑩山さまに言う「二つの月」でした。

きつとひたすらに修行に打ち込む峨山さまは、その一方の月を見落としていたのかもしれません。

梅花流詠讃歌新曲披露

「道心利行御和讃」～願いをこめて～

新曲『道心利行御和讃』

歌詞解説

禅林寺 山中律雄



「正法眼藏・道心の巻」に「しばらくは心を無常にかけて、よのはかなく、人のいのちのあやしきことを、わすれざるべし」という一節があります。「無常」を自分自身の問題として考え、迅速で悔いがゆえに尊いこの世であることを認識し、人の命の危うきこと、命に限りのあることを決して忘れてはいけません」という意味です。

(一)

衆生済度の誓願に 常に在す御仏の

慈悲の光に照らされて 命輝よう嬉しさよ

あなたの真前に向き合わん

利行の道の同朋として



作詞遠藤長博 作曲安田博道 悅

私達は、「全てのものを救う」という、仏様の誓願の慈悲の光のただ中にあり、私達自身も輝くばかりの命を授かっています。その輝く命をどのように活かしたらいいのかということを考えなくてはならないのですが、そのためには「世のため、人のため」という「利他」の心が大事になります。

私という人間を生かすために、世界全体が努力してくれる所以である、と同時に私の生きる目的是、全ての人の幸福のためにあるのだという思いを持つことが大切です。「あなたの真前に

向き合わん」は、仏

菩薩様の前、自分の

心の前、全ての人の

前に立ち、全てのもの

に向かつて、良い

ことをするのだとい

う願いの表れであります。そのことに気

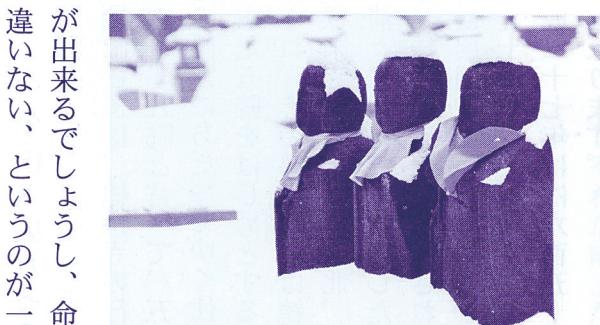
付くことが出来れば、

生きることの意味、

生きることの素晴ら

しさを実感すること

が出来るでしょうし、命の輝く尊さが伝わるに違いない、というのが一番の歌詞の内容です。



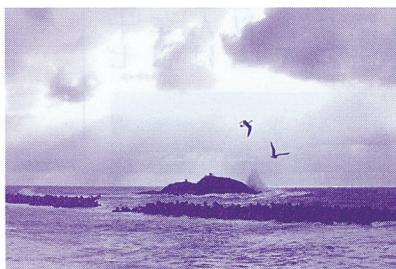
和で、正しく、明るい世の中を言います。そしてその世界は、私達の「何か良いことをしたいと願う心」から生まれてきます。「何か良いことをしたいと願う心」は、「南無帰依三宝」の心、すなわち、仏・仏の教え・教えの実践者（仏法）

(二)

山河自然の厳しさと
恩恵に而今を生かされて

利他の功德を積む人の花の笑顔ぞ美しき
あなたと共に伝えあう 正しき法の灯火を

二〇一一年三月、日本は千年に一度という大きな地震に見舞われました。自然災害は、地震や津波だけでなく、台風もあれば大雪、洪水、干ばつもあります。その一方で、自然是私達に大きな恵みを与えてくれます。人間に限らず、全ての生き物はその恩恵を受けて生きています。時には自然是美しい佇まいで心を癒してくれますし、私達は自然によつて生かされています。



東日本大震災の時、私達はショッキングな場面を目の当たりにしました。泥の海から救い出された赤子を抱き、立ちつくす母の姿。行方不明の母を呼び、泣き叫ぶ少女の姿。津波に流されながら一命を取り留めた父が、家族のために生きようと語る姿などがテレビに放映されました。その映像を見て心の動かなかつた人はいなかつたでしょう。自分に出来ることは何なのだろうか、多くの人が考えたことでしょう。世界中の人が同じ思いを抱いたに違ひありません。

そうした思いこそが仏様の心であり、仏性なのです。私達には生まれついての仏性が備わつ

ています。他人を思いやる心が備わっています。その心が形となつて具体的な行動に移された時、周りにはおのずからなる笑顔が生まれてくるに違ありません。希望を失いかけている人、絶望の淵にある人は、その花のような笑顔によつて勇気づけられることでしょう。

仏性の備わるわが身を、永遠なる法としてのわが身を、みずから拠り所とし、自覚し、護持し、そして広めていく。一つのともし灯から次のともし灯に移っていくように、仏菩薩様の正しい智慧を伝えてゆく。そのことによって平和で、正しく、明るい世の中が作り上げられるのだというのが二番の歌詞であります。

(三)

生死流转の現世にも 心を澄まし爽やかに
今日の勤めを励みなば 菩提の月は宿るなり
あなたを信じ支えあい 希望を抱き進み行く

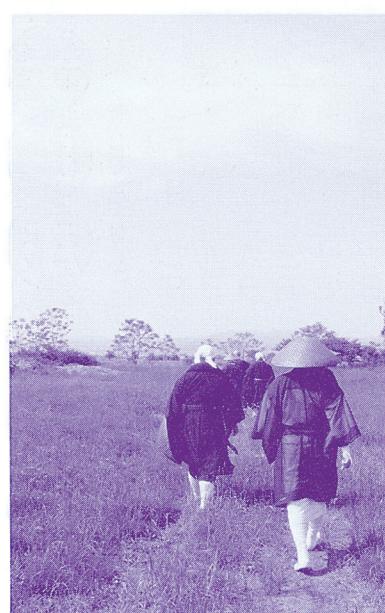
世のすべては「無常」の中にあります。谷川の水がとどこおることなく流れるように、草木が日々新しく変化していくように、すべてのものは移ろっています。何ひとつとして留まるものはありません。人間も同じです。自分の生死さえ思い通りにならないのですから、みずからに生ずるすべてのことは、軽んずることの出来ないものとして引き受けいかなくてはなりませんし、ただ端的な事実として「今」の「われ」に身を置かなくてはならないのでしょう。

そこで私達が大事にしなければならないのは、坐禅の教えを旨とする生活態度です。呼吸を整

え、身を調え、澄明な心を保つということです。真っすぐな心と身をもつて生活するということです。坐禅というと、精神統一の一つの手段のように考えられていますが、坐禅とは、何も思つまいと努力することではなく、何も思うことのなくなつた境地を言います。

自分をよく見つめ、自分の存在をしつかりと確認し、日に新たに、日々新しい意識をもつて、たくましく自らの勤めに励んでいくことが大切であり、それが坐禅の教えに叶う日暮らしでもあります。

ひとたび「利他」の願いを持つならば、社会のため、人のためにという行動は自然に出てくるはずであり、人生の理想に到達した生活を手に入れることが出来るのでしよう。平和で、正しく、明るい世界が生まれることでしょう。清らかで麗しい月の光のような菩薩の心、坐禅の心を持つて、お互いがお互いを信じ支え合い、理想の世界に到る望みをもつて突き進んでいこう、そんな願いが込められているのが三番の歌詞であります。



当玉鳳院梅花講は昭和五十七年の設立で、今年で三十一年目を迎えます。現在の講員さんは十七名ですが、延べ六十名以上の方々と共に梅花の道を歩んでもまいりました。講員の方々には毎年のお涅槃会をはじめ寺院法要の際には詠讃歌をお唱えいただき、厳かな中にも親しみやすい雰囲気にしていただいています。また、毎月の練習も描かず、「梅花に親しむ」と共に「親睦」を深めております。(どちらがメインか?笑い)。

昨今、「講員さんが減つてしまつて…」という声をよく耳にしますが、当講も例に漏れずなかなか講員さんが増えてくれません。が、しかし!ここ三年で三名のフレッシュな新規講員さんが入講してくださいました。プロ野球でいえば、三年連続ドラフト一位指名獲得の快挙であ

常盤山鳳院	住所 能代市常盤
設立 昭和五十七年	
講長 柳川 浩一	
講員 十七人	



紹介者 副住職 柳川一童

前回発行の号は第三十六号の間違いました。
今回改めて、再三十七号として発行させて頂きます。

編集 龜谷

同行読者の皆様へ

ります!フレッシュな方々の毎月の練習は副住職が担当しておりますが、回を追うごとに上達され、ベテランの方々と合流する日も近いのではと、本当に頼もしい限りです。

みんな!梅花やつてみネイガ! おらほの梅花講



テ
レ
ホ
ン
梅
花

(毎週土曜日にテープが代わります。)

018-873-7676

八	七	六	五	四	三
三二十一 十四 七 十三 日 日	月 二十二 十七 三 日 日	月 二十二 十九 六 日 日	月 二十八 八 一 日 日	月 二十七 十一 四 日 日	月 二十三 二十一 六 日 日

報道同迎 謝交行火 (和)	盂蘭盆絵 真清水 (和)	開山忌 心 (和)	伝修証義 心念藏光音 (和)	澄慈地淨觀 鐘善嶺 (和)	妙追高 太祖影向 (和)
高 太祖影向 (和)	御慶供養 戒祝 (和)	御慶供養 戒祝 (和)	御慶供養 戒祝 (和)	御慶供養 戒祝 (和)	道心利行 (和)

〒010-0111 秋田市金足岩瀬字前山3 東泉寺 (018-873-2675)

※ご意見、ご要望等をお気軽にお寄せ下さい。